

Japanese
Survival &
Development
Strategy
in the Coming
21st Century.

飛岡健

日本国民
に告ぐ

いま迫られている精神革命とは

112
C02
569

Japanese
Survival &
Development
Strategy
in the Coming
21st Century.

飛岡健

日本国民 に告ぐ

いま迫られている精神革命とは



日本国民に告ぐ　いま迫られている精神革命とは

一九八九年九月一〇日初版発行

著者——飛岡　健

© Ken Tobioka 1989　Printed in Japan

装幀者——川上成夫

発行者——平田昌兵

発行所——KKベストセラーズ

東京都新宿区大京町三番地　〒二〇六　電話三—三三—九三三　振替東京へー1000へ三

印刷所——新井印刷　製本所——ナショナル製本　写植——大文社

ISBN4-584-18115-2



飛岡 健——とびおかけん

◎——1944年、東京生まれ。

東京大学工学系大学院博士課程修了。
航空工学を専攻し、ロケット、人工衛星の打ち上げに従事する。
1975年、現代人間科学研究所を設立し、
巨視的・学際的な観点から政治、経済、文化、科学技術など
多分野の未来を予測。その成果をもとに、
さまざまな委託研究を行う。

現在、同研究所およびコスモ総合研究所、
サンリオ文化研究所所長、金沢工業大学客員教授ほか
十数社の顧問を兼任している。

◎——著書には「周期の研究」(当社刊)をはじめ、
「史上最大のビジネスチャンス」「文化倍增論」
「バイオの衝撃」など多数ある。

日本の進むべき「王道」を求めて ●まえがき

私はこの本を、心から愛する豊かな国・日本と、誇り高き日本人のために捧げたいと思う。今日、日本は未曾有の経済的発展をとげ、世界有数の長寿国として、そして世界有数の治安のよさを誇る国として物質的に栄えている。

また、識字率のきわめて高い国であり、同時にその体内には伝統的文化を有し、優れた先端技術を世界に誇っている。

しかし、今日の世界をみるに、そのように優秀な国家であり、多くの国々から尊敬を受けてもよいと思える日本にたいする諸外国の評判は、けっして好ましいものではない。

たしかに急成長国への、それも長年にわたって世界を支配してきた白人国家以外の国の急台頭にたいしての先進諸国からの違和感、妬み嫉みといったものや、いまだ大きい優越感による尊大な対応ということもあろう。

だが、冷静にながめたときに、今日の日本の評判の悪さは、そのような「いわれなきもの」

ばかりではなく、我々日本人が歴史のなかでくりひろげてきた行為のなかに、“しかたなきもの”を発見するのである。

その“いわれなきもの”と“しかたなきもの”とを明らかに区別してとらえ、有効に対応していかなないと、日本と世界とのあいだには、ますます摩擦が大きくなり、どこかでふたたび戦争の足音をきくことにもなりかねないのである。

“いわれなきもの”は、その本質からして時間とともにしだいに消滅するが、“しかたなきもの”は、そこに存在理由があるゆえに自然消滅するものではない。したがって、それらに早急に対応して効果的に解決していかねばならないのだ。

ところが今日、この日本の一般国民ばかりか、指導者層自体のなかにも、“いわれなきもの”と“しかたなきもの”との区別が、はっきりとつかない人が多いように見受けられる。それが、今日の政治的混乱を招いているといっても過言ではないだろう。

したがって、本書では“しかたなきもの”“いわれなきもの”を十分に明らかにしていき、国家の正しい運営に役立てたいと思う。

現在の日本は、まさしく“経済・社会・技術”大国であるが、政治・文化・スポーツ・レジャーに関しては、まだまだ小国といえる。

事物を貪欲どんよくに栄養として、吸収・消化していく内臓系に該当する部分はなかなか強いのだが、それらをエネルギーとして多くの他の人々と「人生を楽しむ」ことのデザイン能力に欠けている。すなわち、頭と足とに該当する部分がきわめて弱い、いつてみれば胴体肥満型のお化け的存在となっているのだ。

これを矯正して健全な七等身に、すなわち政治・経済・技術・社会・文化・スポーツ・レジャーの七分野を、すべてバランスのとれた体型にすることが、いまの日本の焦眉しやうびの課題なのである。

時あと一〇年余にして二一世紀を迎える今日は世紀末ともいわれるが、世紀末のみか、ミレニアム(千年)の末でもあり、人類末ともいえなくもない。そういつた時点で、世界ははまだ確固たる「平和の楽園」をこの緑と水の星の上に築いていない。

人類の歴史はいまなお「戦いと殺戮ころ」、あるいは「憎悪と嫉妬」とが渦巻いており、混乱をきわめている。

いぜん存在する貧富の格差問題としての「南北問題」、そしてイデオロギー問題としての「東西問題」を我々人類は、ほとんど解決できていないし、将来の展望を開く解決策すらも見出していない。

そこに、生態系の急速な破壊徴候の出現といった、あらたな重苦しい問題がのしかかっている。だが、それらを我々は、みずからの主体的意思のもとに、勇気をもって解決していかなければならないのだ。

こうした状況のなかで、日本が「輝ける国」として世界の人々の評価と尊敬とを受けられるためにはどうすべきか。まさしく「修身・齊家・治国・平天下」の言葉のごとく、日本人一人ひとりが、みずからを哲学、理念、目標をもった主体的、創造的な人間として完成し、深い愛をもって家を齊え、私心を捨てて国家のために働き、そして広く天下(世界)のためにつくすことが望まれるのである。

そうしたことを可能にさせる国家全体の雰囲気をつくりだしていく政治システムが、いまいちばん求められている。

歴史的にみても、今日まで日本が培ってきた伝統と経済的繁栄をエネルギー源として、その上により崇高な使命感と本質的文化とを接ぎ木するならば、日本が世界のリーダーとしての役割を担うことは可能であると私には考えられる。また、そう考えなければならぬ。

しかし、我々日本人が時代的使命を自覚しないで、あいかわらず世界の明日に責任をもたない居候的な国家として、ひとりこの地球上で経済のみを追い求めるならば、日本の命運は早晩

つきはて、我々の愛しき子孫は今日に生きる我々の「おろかき」によつて近い将来、世界のなかで孤立し、厳しい天運を甘受しなければならぬことになるであらう。

私は、日本および日本人には、他の国の優れた人々とともにこの地球に「地上の楽園」を築くリーダーとしての資格と資質とがあると考へている。

こういつた発想はときとして、かつての「選民主義」のような誤解を受ける恐れがあるが、そうではない。私はけつして武力をもつて世界を支配する覇権主義を考へてゐるのではなく、おのずと民の上に押しあげられる「王道」を語つてゐるのである。

いずれにしても、日本人一人ひとりの脳裏のなかに、我々こそが世界のリーダーとしての役割を担うという意識の確立がないかぎり、当然、そういった方向でみずからを磨くこともないし、結果的にリーダーとしての資質が身につくことはない。

このままでは、これからの時代においても、日本と日本人が、世界のためにリーダーとして働く光景をこの地球上でみることはないであらう。

それゆゑ私は、日本の国民一人ひとりとともにこの問題を考へ、問題解決のための行動に移すために、あえて『日本国民に告ぐ』という大それたタイトルをこの本に用いた。

けつして、ここで述べる私の認識が、これからの日本にとって唯一絶対のものとは考へてい

ない。むしろ、多くの人々がより優れた思想のもとに、私の考えに異論を唱え、それらが新しい国民の総意としてまとまるならば、それこそ私の本願であるし、望ましいことである。

今日早急に、多くの日本国民が素直に「おかしい」と感じていることをほうっておくことなく、みずからの頭のなかでとらえ直し、何らかの考えを形成し、それに基づいて政治にたいして行動する、あるいは「おかしい」と感じていることを言葉にして何らかの形で社会に問い、そしてみずからが改善していく努力をすることが望まれる。

まさしく日本国民一人ひとりの行動こそが、いま待ち望まれている。日本という国家は、みずからが存在している場で、我々一人ひとりがつくっているのだ。他国の誰かがこの日本を動かしているのではなく、我々日本国民一人ひとりが力を集めてこの国を動かしているのだ。

この認識をとりもどし、国民一人ひとりがみずからの素直な感情をもとに行動することが、この日本をかえていくことになるのだ。

私はこの本のなかでいろいろと提案をしているが、おそらくほとんどの良識ある日本国民が、日ごろ考えていたり、感じていることだと思う。それらの事柄が、素直に国政に反映しない社会はどこかおかしいのである。

しかし近い将来、日本は国民の素直な感情に応える「新しい国家」として生まれかわるもの

と信じている。

あらためていうが、私はこの書を今日の日本を築いた我々の三〇億の祖先と、これからの日本を守っていく子孫に贈りたいと思う。そして日本の存在が、これからの世界の繁栄と平和のためになることを願うしだけである。

そのため、私はこの本の印税を四つに分けて使いたいと思う。まず、私自身を修めるために四分の一、家族と会社のために四分の一、そして国のために四分の一、さらに世界のために四分の一をと考えている。具体的には、日本の緑を守るための基金と、諸外国からの留学生のために寄付させていただくことにしたいと思う。

一九八九年八月

飛岡 健

1部 ● 世界の中の日本をどこまで認識しているか

1 今日の日が 突きつけられた問題とは

「出ていく国際化」と「入ってくる国際化」

20

経済・技術だけの大国では許されない

25

日本ほど「不気味」で「うつつかしい」存在はない	30
我々は「理念・哲学・目標」を持つているか	35
歴史に残る「負の遺産」を自覚すべし	40
世界の本当の対日イメージを知りなさい	44
旧時代の法や制度では未来を描けない	48
国民の自律性と自由度を確立せよ	55
「平和ならいい」という単一思考は危険だ	58
「慈悲」の精神だけでは世界に通用しない	63
国家としての「イズム」が日本には欠けている	66
日本人は自らの意思と計画を持って	69
都市計画が教える「戦略思考」の重要性	74
我々は創造性に乏しいという評価のウン	78
「情報」の輸出量をもっと増加させよ	81

2 国際社会の大潮流、 その正しい読み方

- この視点から国際社会の動きを握め…………… 86
- 第V文明は21世紀の日本に開花しうるか…………… 89
- 先進諸国はいよいよ「西問題」に直面する…………… 95
- 情報化パワーは社会主義国を変えはじめた…………… 99
- 米ソのデタントを日本は喜べない?!…………… 104
- 東南アジアの今後には日本が取るべき態度とは…………… 112
- 西側ヨーロッパは日本にイラ立っている…………… 114
- 日本と欧米の精神距離は縮められるか…………… 117
- 経済競争と地球容量の二律背反を克服せよ…………… 120
- 日本は「新マーシャルプラン」を提示できるか…………… 124
- 世界が模索する「ポスト情報化社会」に遅れるな…………… 129

II部●この「精神革命」が、いま我々に迫られている

3

政治改革

●混迷脱却への新システムの必要性

- 小手先の政治改革ではもはや解決できない
138
- 「政治は国家の要諦」を忘れていないか
139
- 政治改革を政治家がやるバカな話
144
- マスメディアは独自の理念・哲学で行動せよ
149
- 「三権」と自民党の馴れ合いを断ち切れ
153
- 地方分権実現の具体的システムとは
156

地方の自立なくして政治変革はあり得ぬ	160
大衆が天下国家を論じることの大切さ	163
この「選挙制度」で本当の代表者を送り込め	167
政治家にはこの六つの資質が必要	170
官僚システムの改造と省庁の統廃合案とは	171
予算は司法、行政に独自に握らせよ	175
外交態度の一八〇度転換が急務だ	177
北方領土と対ソ戦略をどう考えるか	180
外国人労働者は効果的に受け入れよ	182
適用力の低下した法律は見直すべき	184
国土を生かす土地政策の鍵とは	186
税に対する国民の思想の明確化を図れ	188

4 経済改革

●競争原理と成長限界の矛盾を突破する

第二次産業への戦略的な人材投入を！

192

国家経済の相対的競争をどう乗り切るか

195

日本国民の経済感覚に大疑問あり

197

メッセ産業の開拓が商業優位国の条件だ

200

5 社会改革

●真の「富民」を目指すために

社会停滞を招く「私権」は制限すべき

204

日本人の「働き過ぎ」は何を誤っているのか

207